

平成 29 年度

病害虫発生予報第 3 号

平成 29 年 6 月 22 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ <http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/index.htm>

目次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	8
4. 予察項目の見方	15
5. 気象のデータ	16
6. おしらせ	18

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、葉いもち、白葉枯病、斑点米カメムシ類、ツマグロヨコバイの発生量は**平年並**と予想されます。穂いもち、セジロウンカの発生時期および発生量は**平年並**と予想されます。イネクロカメムシの発生量は**やや少**と予想されます。紋枯病の発生時期は**平年並**、発生量は**やや少**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、ミカンハダニの発生量は**やや多**と予想されます。発生密度が高くなると防除が困難になります。1 葉当りの雌成虫発生数が 0.5~1.0 頭程度を目安に防除してください。黒点病、チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**と予想されます。そうか病、かいよう病(温州みかん、中晩柑)の発生量は**やや少**と予想されます。

ナシでは、黒星病、ハダニ類の発生量は**平年並**と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は**平年並**と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は**やや少**と予想されます。

3) 茶

チャでは、カンザワハダニ、チャノホソガ、チャノコカクモンハマキの発生量は**やや多**と予想されます。適期防除を心掛けてください。チャノキイロアザミウマ、クワシロカイガラムシの発生量は**平年並**と予想されます。クワシロカイガラムシの発生時期は**やや早**と予想されます。炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイの発生量は**やや少**と予想されます。

4) 野菜

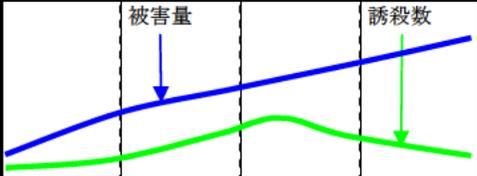
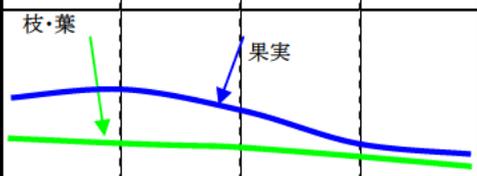
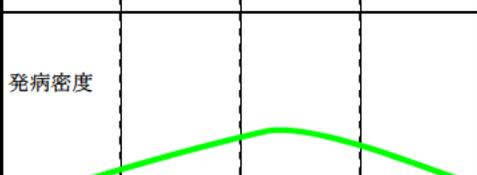
イチゴでは、炭疽病、ハダニ類の発生量は**平年並**と予想されます。うどんこ病は**やや少**と予想されます。

ネギでは、ネギコガの発生量は**平年並**と予想されます。

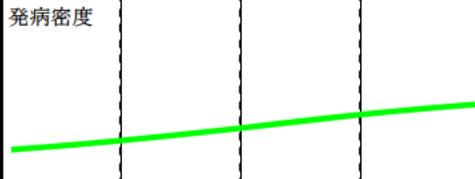
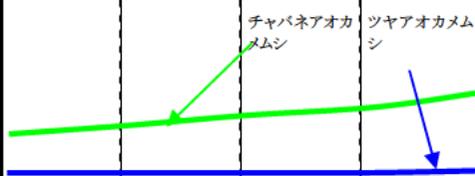
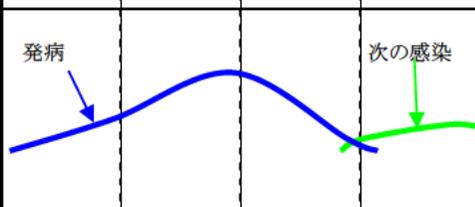
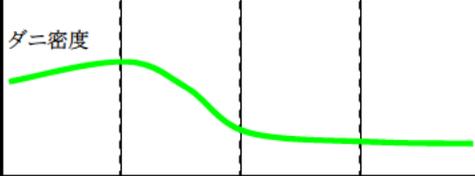
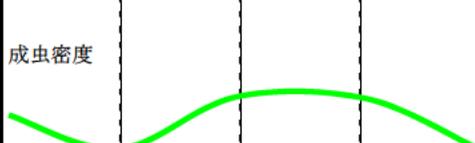
農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

2. 作物別の状況

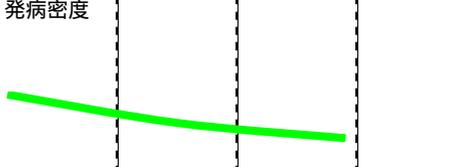
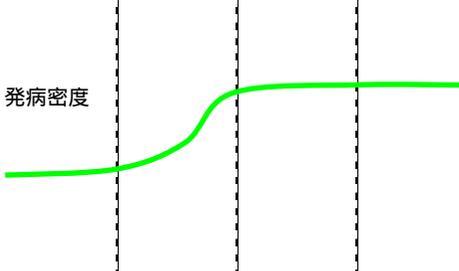
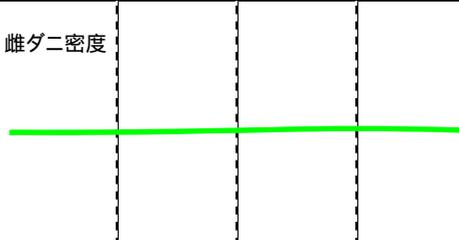
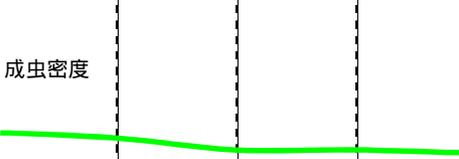
作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項	
						6月		7月			
						下旬	下旬	中旬	下旬		
イネ	葉いもち	—	平年並	中	普通	発病密度					<ol style="list-style-type: none"> 圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めてください。 補植用置き苗は発生源となるので、速やかに取り除いてください。 感染適温は 24℃で、葉身の「ぬれ」時間が長いほど感染量が多くなります。 雨天が続いた場合、天気予報を参考にしながら、雨の合間を見計らって防除をしてください。
	穂いもち	平年並	平年並	中	普通		発病密度	出穂 ↓		<ol style="list-style-type: none"> 上位葉の葉いもち病斑が伝染源となります。 圃場および周辺圃場での葉いもちの発生状況に注意してください。 薬剤散布は出穂始めから穂揃い期に予防的に行ってください。 	
	紋枯病	平年並	やや少	小	普通	発病密度		出穂 ↓	<ol style="list-style-type: none"> 幼穂形成期頃(穂肥時期)から発生が目立つようになります。 水面に近い茎から茎へ感染します。薬剤散布によって病斑の上位葉への進展を阻止してください。 		
	白葉枯病	—	平年並	小	低		発病密度	出穂 ↓		<ol style="list-style-type: none"> 深水、冠水、台風によって感染や発病が助長されます。 常発地では台風直後に薬剤散布をしましょう。予防的な薬剤散布は効果が高いです。 「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意してください。 	
	斑点米カメムシ類	—	平年並	小	普通		アカヒゲホソミドリ リカスミカメ	アカスジカ スミカメ	ホソハリカメムシ シクモヘリカメ ムシ	<ol style="list-style-type: none"> 畦畔などのイネ科雑草で増殖します。草刈りをこまめに行い、イネ科雑草の穂がつかないように管理してください。 水田内で雑草が多発すると、水田への侵入を助長するため、早めに除去しましょう。 草刈りは出穂 10 日前までに行いましょう。出穂直前および出穂後の草刈りは、水田への侵入を助長するおそれがあります。 	

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	イネクロカメムシ	—	やや少	小	普通		被害量		誘殺数	<ul style="list-style-type: none"> 1) 常発地で薬剤散布する場合は、越冬成虫の発生量がピークとなる6月下旬に実施してください。 2) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。
	ツマグロヨコバイ	—	平年並	中	低		成虫密度			<ul style="list-style-type: none"> 1) 萎縮病を媒介するが、本県での発生は少ないとされています。 2) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。
	セジロウンカ	平年並	平年並	小	低		成虫密度			<ul style="list-style-type: none"> 1) 例年、6月末から7月にかけて海外から飛来します。九州以北では越冬できないとされています。 2) 被害の発生は局所的であることが多いです。 3) 防除不要な年が多いですが、多発時は発生予察情報に従い防除してください。
カンキツ	そうか病	—	やや少	小	普通		枝・葉	果実		<ul style="list-style-type: none"> 1) 常発圃場や昨年多発した圃場、幼木園、高接ぎ更新園の温州みかんでは、発生に注意してください。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までとされています。
	黒点病	—	平年並	小	普通		発病密度			<ul style="list-style-type: none"> 1) 枯枝が伝染源です。梅雨時期の枯枝発生に注意し、樹冠内や圃場内の枯枝を除去してください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が200～300mmに達した時を目安に実施してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	かいよう病	-	温州 やや少	温州 小	温州 低	発病密度		1) 降雨があると急速に感染が広がるので、発生圃場では雨の合間に防除してください。 2) 発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分してください。 3) 幼木や高接樹ではミカンハモグリガの被害部に発病しやすいので、ミカンハモグリガの防除を実施してください。 4) 中晩柑類では、梅雨期頃から10月中下旬頃まで果実への感染が起こります。		
	ミカンハダニ	-	やや多	大	高	ダニ密度		1) 病害虫防除技術情報第4号(6月20日発表) 2) 発生密度が高くなると防除が困難になります。1葉当りの雌成虫発生数が0.5~1.0頭程度を目安に防除してください。 3) 薬剤は葉裏にもかかるように散布してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。		
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	中	普通	成虫密度		1) 寄生果率10%を目安に防除してください。 2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。 3) 圃場周辺のイヌマキ・サンゴジュ等が発生源となります。		
ナシ	黒星病	-	平年並	小	普通	発病密度		1) 発病果及び発病葉は除去して、圃場外に持ち出し処分してください。 2) 発病が確認される圃場では、すみやかに防除を計画してください。 3) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けてください。		
	ハダニ類	-	平年並	中	普通	ダニ密度		1) 1葉当り寄生数が1~2頭で防除を実施してください。 2) 7~8月に密度が高くなります。徒長枝での発生にも注意してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
						6月	7月				
						下旬	上旬	中旬	下旬		
ブドウ	べと病	—	平年並	小	普通	発病密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨が連続すると病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布してください。 2) 降雨の合間に防除を計画してください。 3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので圃場外に持ち出して処分してください。 4) 同一系統薬剤の連用を避けてください。
果樹共通	カメムシ類	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 7月後半以降で飛来数が増加する可能性がありますので注意が必要です。 2) ナシ(無袋栽培)、カキでまとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。 3) 中山間地や以前多発したことがある地域では、圃場への飛来に注意してください。 	
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通	発病		次の感染			<ol style="list-style-type: none"> 1) 旧葉の病斑が感染源です。新葉の展葉までに毛茸の脱落部分から感染します。 2) 新芽の1葉期前後に感染し易く、潜伏期間の15~20日を経て発病します。 3) 二番茶摘採後に整剪枝を行うことによって、発生が抑制できます。
	カンザワハダニ	—	やや多	中	普通	ダニ密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 葉裏に産卵するので、丁寧に散布してください。 2) 天敵が増加する時期なので、天敵に影響の少ない薬剤を選択してください。 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので同一系統の薬剤の連用は避けてください。
	チャノホソガ	—	やや多	小	普通	成虫密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 年間6~7世代発生します。 2) 防除適期は孵化直後の潜葉期(絵描き状態)です。 3) 二番茶期にジアミド系薬剤を使用した場合は、7月以降は他の系統の薬剤を使用してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや少	小	普通					1) 年間 5～8 回発生し、新芽を加害します。葉先が褐変し、ひどくなると落葉します。 2) 萌芽期～開葉初期に防除してください。
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	中	普通					1) 年間7～8回発生し、新芽を加害します。萌芽初期に芽の芯から加害し、条痕となります。 2) 萌芽期～開葉初期に防除してください。
	クワシロカイガラムシ	やや早	平年並	小	普通					1) 病害虫防除技術情報第2号(5月15日発表) 2) 年3回発生します。孵化最盛期の2～5日後が防除適期です。 3) 有効積算温度による発生活消長予測式では、第2世代幼虫の孵化最盛期は平年よりやや早いと予測されます。 4) 歩行型幼虫の発生状況をルーペ等で実際に確認して防除してください。 5) 孵化開始から2週間程度の断続的な散水により孵化抑制及び孵化幼虫の生存率を低下できます。 6) 天敵に影響の少ない薬剤を選択してください。
	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	小	普通					1) 年間4世代発生します。防除適期は誘殺ピークの7～10日後です。 2) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップの誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。 3) 交信かく乱剤をまとまった面積に実施することにより、次世代以降の密度を下げるができます。 4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため同一系統の薬剤の連用は避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イチゴ	うどんこ病	-	やや少	中	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 育苗期の防除を徹底してください。 2) 薬剤防除は予防散布に努めます。葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布してください。 3) 発病を認めたときは、集中的に散布して感染拡大を防いでください。
	炭疽病		平年並	中	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 病原菌は高温多湿条件を好み、梅雨時期以降に発生が多くなるため、十分な注意が必要です。 2) 病原菌(孢子)を含む水の跳ね返りで感染が拡大します。頭上灌水は避け、株を濡らさないようにしてください。 3) 発病株は感染源となるため、周辺株を含めて直ちに除去し、処分してください。 4) 薬剤防除は、薬液が株元まで十分かかるよう丁寧に散布してください。
	ハダニ類		平年並	小	普通	雌ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 作物残渣から歩行によって移動します。葉かき後の残渣は圃場外に持ち出し、速やかに処分してください。 2) 多発すると防除が困難になります。早期発見に努め、発生初期に防除を行ってください。 3) 散布は葉裏を中心に丁寧に行ってください。 4) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用は避けてください。
ネギ	ネギコガ	-	平年並	小	普通	成虫密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 春から秋にかけて4~5回発生します。 2) 幼虫は葉の内部に潜り、表皮を残して食害します。潜入防止のため、発生初期から防除を行うことが重要です。

3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) プラストム(6月15日現在)によると、感染好適条件は5月25、26日、6月7日に、一部地域で出現 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、本田における発生圃場率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は無～少であり、一部地域の普通期育苗で確認 (±)</p> <p>考察： プラストムによる判定結果および巡回調査圃場、一般圃場の状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	穂いもち	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 農業研究所作況試験田(4月25日移植コシヒカリ、移植59日目)によると、葉齢の進展は平年並 (発生時期±)</p> <p>3) 一般圃場では、生育はやや早～平年並の傾向 (発生時期間±)</p> <p>4) 葉いもち発生量は平年並の予想 (±)</p> <p>考察： 水稻の生育状況を考慮して予想発生時期は平年並、葉いもちの予想発生量を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	紋枯病	平年並	やや少	<p>要因</p> <p>1) 農業研究所作況試験田(4月25日移植コシヒカリ、移植59日目)によると、葉齢の進展は平年並、茎数はやや少 (発生時期±、発生量-)</p> <p>2) 昨年8月の巡回調査圃場では、発生圃場率22.5%(平年29.2%)とやや少、発病度1.5(平年2.0)とやや少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、生育はやや早～平年並、茎数はやや少～平年並 (発生時期±、発生量±)</p> <p>考察： 水稻の生育状況を考慮して予想発生時期は平年並、同様に水稻の生育状況と感染源となる越冬菌核量を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 県内では4月以降、激しい風を伴う大雨はなし (-)</p> <p>考察： これまでのところ、激しい風雨による冠水の機会は少ないため、予想発生量は平年並に少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	斑点米カメムシ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1)水田位置予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ28頭(平年13.1頭)と多、アカヒゲホソドリカスミカメ5頭(平年36.1頭)と少(±)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第2週)では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率は、ホソハリカメムシで3.4%(平年8.7%)と少、クモヘリカメムシで0%(平年0.2%)と平年並に少、シラホシカメムシ類で2.5%(平年5.1%)と少、アカスジカスミカメで40.7%(平年36.9%)とやや多(±)</p> <p>3)2)の調査で捕獲した成幼虫数は、ホソハリカメムシで0.03頭(平年0.15頭)と少、クモヘリカメムシで0頭(平年0.01頭)と平年並に少、シラホシカメムシ類で0.07頭(平年0.09頭)とやや少、アカスジカスミカメ2.5頭(平年2.1頭)とやや多(-)</p> <p>考察：予察灯、巡回調査結果から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1)予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数は水田位置2頭(平年7.7頭)とやや少、畑位置45頭(平年163.9頭)と少(-)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率0.4%(平年3.4%)と少、25株当り成虫数0.004頭(平年0.02頭)とやや少(-)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は無~少(-)</p> <p>考察：予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1)予察灯(4月第1半旬~6月第2半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置0頭(平年0.5頭)、紀北町0頭(平年0頭)、御浜町0頭(平年0頭)、伊賀市(5月第1半旬~6月第1半旬)0頭(平年0頭)とそれぞれ平年並に少、松阪市・畑位置12頭(平年136.9頭)と少(-)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第2週)では、払い落とし成幼虫数0.4頭(平年0.2頭)とやや多(+)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は無(概して平年並に少)(±)</p> <p>考察：予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並みと考えます。</p>
	セジロウンカ	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1)予察灯(松阪市、紀北町、御浜町)では、6月15日現在、伊賀市では6月6日現在、未飛来、(松阪市・平年初飛来7月8日、昨年初飛来6月22日)(発生時期±)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第2週)では、払い落とし成虫数は0頭(平年0.002頭)と平年並に少(±)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は無(±)</p> <p>考察：これまでの飛来状況から発生時期は平年並、現在の飛来状況から当面は密度が大きく上昇することはないと予想されるため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	そうか病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、無防除)では、春葉発病率 79.5%(平年 64.2%)と平年並、発病果率 85%(平年 54.5%)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 0(平年 0.04)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、無防除)では、果実発病率 13.3%(平年 22.4%)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 0.15(平年 1.24)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>5) 感染源となる枯枝量は平年並 (±)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいよう病	-	温州 やや少 中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、新甘夏、無防除)では、春葉発病率 0%(平年 1.8%)とやや少、発病果率 0%(平年 0.5%)と平年並 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病率は温州みかんでは 0%(平年 0.14%)と少、中晩柑では 2.33%(平年 2.95%)とやや少 (-)</p> <p>5) 中晩柑類の一般圃場での発生量は少 (-)</p> <p>考察: 温州みかんでは、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。中晩柑類では、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、寄生頭数は無防除区 224.4頭 / 100葉(平年 33.2頭 / 100葉)と多、慣行防除区 23.3頭 / 100葉(平年 13.4頭 / 100葉)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週:調査日雨天)では、春葉寄生率 2.25%(平年 11.5%)と少、寄生頭数 0.03頭 / 葉(平年 0.44頭 / 葉)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場のうち、紀州地域では多、それ以外では平年並(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月上旬、無防除)では、誘殺数 1.2 頭/日(平年 0.99 頭/日)とやや多 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、無防除)では、寄生虫数 1.7 頭/100 果(平年 0.25 頭/100 果)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害果率 0%(平年 0.5%)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
ナシ	黒星病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率 0.9%(平年 2.2%)とやや少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：一般圃場の状況を重視して現状の発生量はやや多と考えられますが、今後の気象予報を考慮し、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生葉率 0%(平年 0.02%)と平年並、寄生頭数 0 頭/葉(平年 0.00 頭/葉)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
ブドウ	べと病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率 0%(平年 0.05%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：一般圃場の状況を重視して現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹 共通	カメムシ類	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町 6月上旬)では、誘殺数はツヤアオカメムシは 11 頭(平年 97.3 頭)と少、チャバネアオカメムシは 0 頭(平年 971.3 頭)と少 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月第2半旬)では、誘殺数はツヤアオカメムシ 3 頭(平年 44.7 頭)と少、チャバネアオカメムシ 32 頭(平年 127.9 頭)と少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月第1週)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 9.3 頭(平年 18.5 頭)と平年並、中間地(津市白山町二本木)で 92.8 頭(平年 165.2 頭)と平年並、山地(津市白山町川口)で 30.9 頭(平年 51.9 頭)と平年並 (±)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週、カンキツ圃場)では、叩き落としまたは見取り調査による飛来は 0.08 頭(平年 0.07 頭)と平年並 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	炭疽病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 11.1%(平年 8.8%)とやや多、新葉発病葉数 0.1 枚 / m²(平年 0.2 枚 / m²)とやや少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、寄生頭数 0 頭 / 葉(平年 0.11 頭 / 葉)と少、寄生葉率 0%(平年 3.0%)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 61.2%(平年 32.1%)と多、寄生葉率 4.7%(平年 4.0%)と平年並、寄生頭数 0.10 頭 / 葉(平年 0.09 頭 / 葉)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 巡回調査圃場の発生状況を重視して現状の発生量は平年並と考えられ、今後の気象予報を考慮し、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノホソガ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第3半旬~6月第2半旬)では、誘殺数 2,361 頭(平年 2,053.4 頭)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、巻葉数 0.3 枚 / m²(平年 0.2 枚 / m²)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 県予察圃と巡回調査圃場の発生状況を重視して現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(5月第3半旬~6月第2半旬)では、捕殺数9頭(平年46.1頭)と少の傾向 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、叩き落とし虫数1.7頭(平年1.8頭)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察： 県予察圃および一般圃場の状況を重視して現状の発生量は少と考えられ、予想発生量はやや少とされます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(5月第3半旬~6月第2半旬)では、捕殺数768頭(平年1,105.5頭)と平年並の傾向 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、叩き落とし虫数0.6頭(平年11.2頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 県予察圃および一般圃場の状況を重視して現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	やや早	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 有効積算温度による予測式では、第2世代幼虫孵化最盛日は7月18日頃(平年7月21日頃) (発生時期 -)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、雌寄生株率2.8%(平年7.4%)と少、雄繭発生株率3.6%(平年8.5%)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察： 発生時期; やや早、一般圃場の状況を重視して現状の発生量はやや少と考えられ、今後の気象予報を考慮し、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第3半旬~6月第2半旬)では、誘殺数394頭(平年203.9頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数0.7枚/m²(平年0.48枚/m²)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、ハマキムシ類の発生量はやや多 (+)</p> <p>考察： 現状の発生状況はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多とされます。</p>
イチゴ	うどんこ病		やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0.2%(平年6.4%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~やや少(概して少) (-)</p> <p>考察： 現状の発生量は少と考えられ、気象条件を考慮して予想発生量はやや少とされます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	炭疽病		平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~やや少 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量は、平年並に少と考えられ、気象条件を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類		平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生株率1.8%(平年8.2%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられ、気象条件による増加の見込みから予想発生量は平年並と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ		平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は平年に比べ少なく、気温は平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬~6月第3半旬)では、誘殺数は45頭(平年197.3頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害葉率0%(平年0.3%)と平年並に少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は無 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並に少と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期(平年比)： 平年の発生日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅				

発生量(平年比)： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量(程度)： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率(平年比)： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報(平成 29 年 6 月 15 日 名古屋地方気象台発表)

平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

向こう 1 か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに 40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに 40%です。

1 週目 6 月 17 日～ 23 日	期間の前半は高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、後半は前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.6 日・3.2 日
2 週 6 月 24 日 30 日	前線や低気圧の影響で平年同様に曇り雨の日が多いでしょう。	同 2.5 日・3.1 日
3～4 週目 7 月 1 日～ 14 日	前線や低気圧の影響で平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。	同 5.7 日・5.6 日

東海地方週間天気予報(平成 29 年 6 月 20 日 10 時 35 分 名古屋地方気象台発表)

予報期間 6 月 21 日～ 6 月 27 日

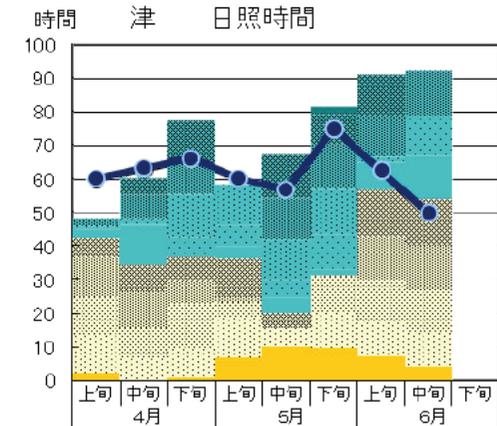
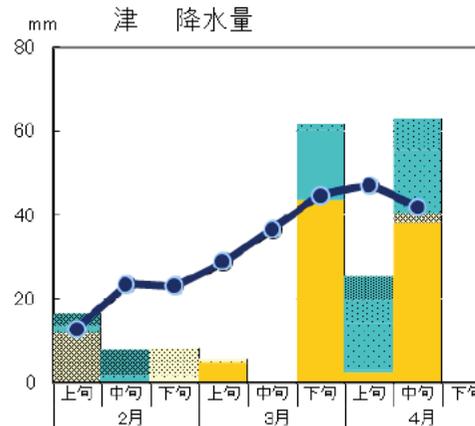
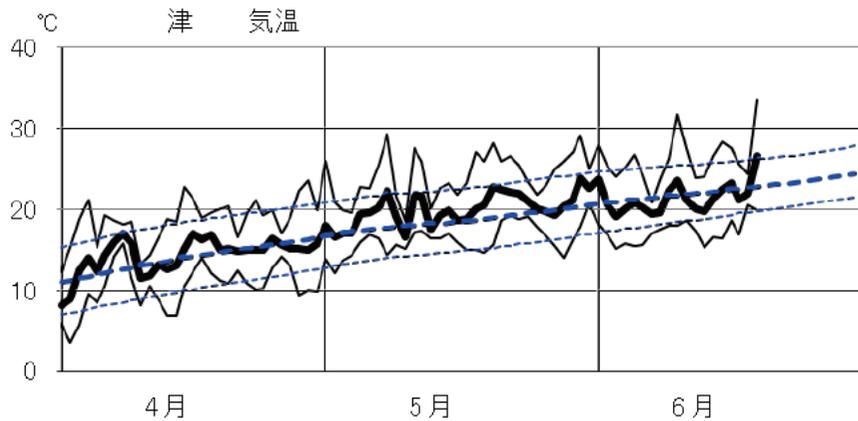
向こう1週間は、梅雨前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が続くでしょう。

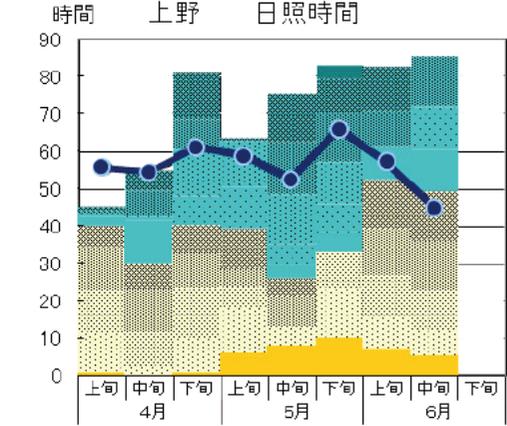
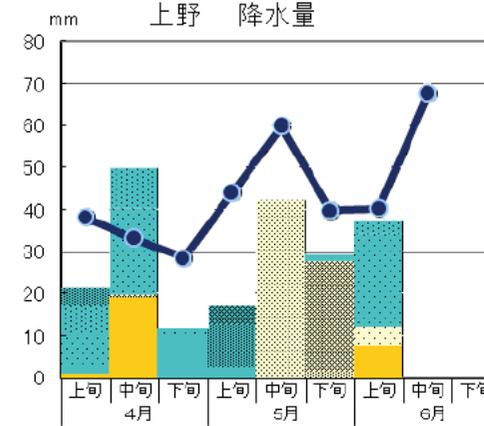
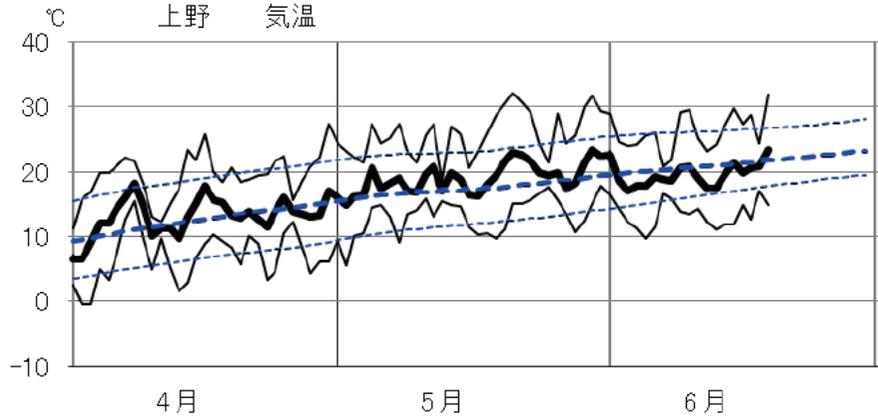
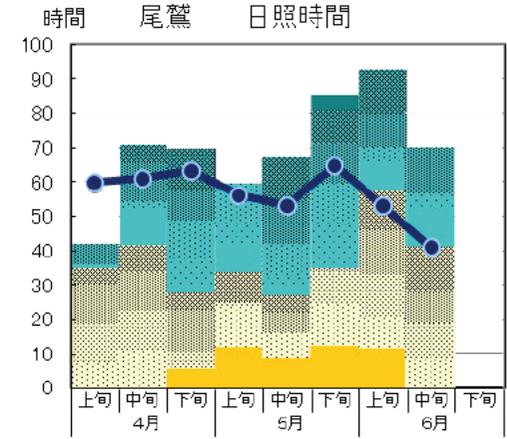
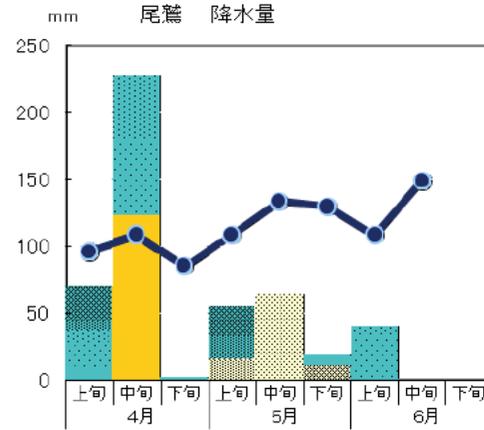
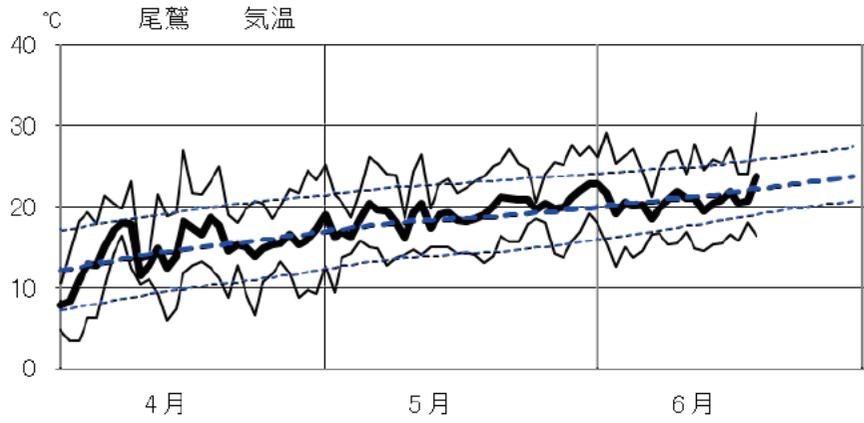
最高気温は、21日は平年より低いですが、その後は平年並か平年より高いでしょう。

最低気温は、21日は平年か平年より高い見込です。

降水量は、平年より多いでしょう。

気象の日別推移(気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (6 月 19 日まで)





- 凡例
- 平均
 - 最高
 - 最低
 - - - 平年平均
 - - - 平年最高
 - - - 平年最低

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

6. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

第1回 4月20日(木)(済み)	第2回 5月25日(木)(済み)
第3回 6月22日(木)(今回)	第4回 7月20日(木)
第5回 8月24日(木)	第6回 10月19日(木)
第7回 3月22日(木)	

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/index.htm>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアド

レスからお入りください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000625689.pdf>

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/39475007379.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

7) IPM(総合的病害虫・雑草管理)実践指標について

三重県では IPM を実践する上で必要な農作業の具体的な取組内容を示した作物別の指標を公表しています。農業者の皆さんの取組について、現状把握と今後の気づきにご活用ください。病害虫防除所ホームページにリンクを設定しています。

三重県農林水産部農産園芸課ホームページ内

<http://www.pref.mie.lg.jp/NOAN/HP/80301022763.htm>